

日本の絶滅危惧種ツシマヤマネコについて学ぶ、
市民協働による複数の教育プログラムの開発及び実施

京都市動物園 種の保存展示課 学芸員/畜水産技術者 岡部光太

＊動物園は自然教育の場

動物園は「種の保存」・「自然教育」・「動物の研究」・「レクリエーション」という4つの役割がある。動物園は博物館相当施設であり、間近で動物を観察することから、野生を実感し、特に子どもが動物に興味を持つ導入の場所ともなっている。一方で、動物園の人気動物は「キリン・ライオン・ゾウ」であり、地味なイメージがある日本産動物はあまり注目される機会が得られないという状況にある。



＊ツシマヤマネコとは？

ツシマヤマネコはアムールヤマネコの「変種」として考えられている絶滅危惧種である。現在生息数は、長崎県の対馬に70もしくは100頭前後と考えられており、環境省と（公社）日本動物園水族館協会の共同で保護繁殖事業が進められているところである。京都市動物園は、第二繁殖拠点として現在活動しており、「やまねこ博覧会」という普及事業を2012年より実施している。

＊動物園の教育普及の現状

「やまねこ博覧会」は2015年で4回目の開催であり、特に子どもを対象としたプログラムとして今までに「やまねこ人形劇」や「やまねこコンサート」を実施してきた。来園者には共に好評であったが、いずれも飼育現場を持つ職員の実施であり、なかなか充実化を図れない状況にあった。そこで、今回は、市民協働の形態を取り、地元京都の団体（人形劇団・交響楽団）と共同で教育プログラムを実施し、充実を図った。

＊ツシマヤマネコの住む対馬へ

動物園の飼育員が担当している動物の生息地へ調査・観察へ行く機会は、あまりないのが実情である。実際に担当動物の生息地の環境や風土を学ぶことは、動物を伝える立場として必要なことである。そこで、今回は現地で保護活動を行うNPO団体の調査活動に参加し、そこで得た経験を今回の普及活動のベースにすることにした。2015年9月16日-9月19日で対馬へ行き、田んぼでの野生個体の観察やナショナル・トラスト事業で保護



©羽根佳雄

を行う地区の視察などを行った。実際、対馬では3回野生個体を観察することができた。また、保護地区での視察では対馬の独自の野生動物や風土を知ることができた。一方で、地元住民の方にはあまりツシマヤマネコに興味がない方もおり、そういった所で地元への教育普及の重要性を感じた。

*「やまねこ博覧会」の実施

2015年10月16日（人形劇）、17日（コンサート）で、京都の地域団体と開発した教育プログラムの実施を行った。子どもの集中力を考慮し、それぞれ30分程度のプログラムとし、2回ずつ実施した。いずれの実施も家族連れを中心に100名以上の参加があり、結果として好評であったと考える。また参加者の反応を調べるため、自由記述のアンケートの実施と実施時の参加者の様子を動画で記録した。アンケート及び動画の記録から、それぞれのプログラムの特徴を検討した。人形劇のアンケートには、ネコなどの人形劇に登場したキャラクターのイラストや「尻尾が太い」・「意外と小さい」などツシマヤマネコの容姿に関する内容が見られ、動物の大きさや模様などを伝えることに有効性が考えられた。またキャラクターとして登場させた動物園の飼育個体に関する記述も見られ、動物園の個体へのフィードバックにも通じた部分があると考えられる。



コンサートのアンケートには、ツシマヤマネコの生態や保護活動など、まんべんなく進行内容に加えた結果、それらに対するアンケート記述が見られ、包括的に「ツシマヤマネコ」の保護活動について伝えることができたと考える。またアニメの曲や着ぐるみと一緒に踊るなど子どもが聞きやすい内容を組み込んでいたが、演奏そのものに対して「音楽がきれいでした」など、特に高齢層からの反応が見られ、結果として幅広い年齢層に反応の良いプログラムになったと考える。

*教材としての映像資料の作成と実施

教育プログラムの作成と同時並行で、対馬で記録した動画を教材として利用するため、編集し「やまねこ博覧会」で講演を実施した。また作成した映像資料は環境教育の一環として、他の動物園の方にも教材として利用していただき、野生動物の保全を学ぶ大学と専門学校それぞれで授業を行っている。

*動物園水族館教育研究会への参加

「やまねこ博覧会」で実施した内容について、第56回日本動物園水族館教育研究会沖縄大会へ参加し発表を行った。研究会では、生物教育に携わる盛口満氏の講演もあり、離島ならではの独特な自然環境についてお話をうかがった。講演の中では、地元の方があまり自分たちの生活する自然環境の特殊性にあまり興味がないことも話されており、対馬と同じような傾向があることを感じた。

*まとめ

プログラムの実施を通じて、ツシマヤマネコを知る導入の場を作ることができたと考える。今回実施した教育プログラムの特性を生かして、継続的なプログラムの実施を行いたい。また「地域住民への教育」の大切さを行く先々で感じた。市民の自然教育である動物園という場を生かし、日本産動物や京都の自然を伝えて行く場にしていきたいと感じた。